見続けた北野の八〇余年

高橋　花枝　昭和二（一九二七）年生まれ　北野在住
尾崎　登美子　昭和三（一九二八）年生まれ　北野在住

生まれも嫁ぎ先も北野

高橋　生まれてからずっと北野です。実家は藤宮という名字で、すぐ近くです。農家だったけど、屋号が「炭屋」というので、昔は炭を作っていたと思う。私が生まれる前は蚕を飼っていて、昭和五〇（一九七五）年頃までは、中二階に蚕様の部屋のある建物だった。土間の右に自分たち家族、左に奉公人が住んでいたね。私は物置で生まれました。

尾崎　私の実家は高橋で、花枝さんは兄嫁です。うちも農家だったけど、じいちゃんと息子が養鶏をしていたの。だから屋号みたいに「鶏や（とりや）」って言われていた。当時は卵が高かったから、生活は楽だった。それで女学校に行かせてもらえた。

高橋　小学校は大和田小学校で、二〇分くらいかかったね。畑道だったので、冬はぬかっちゃって大変だった。雪が積もると歩けないから、親御さんがみんな出て、学校に行く道を雪かきしてくれた。

尾崎　このあたりはまだいいんですよ。小学校は大和田町に一つしかなかったから、志木の駅のあたりの人や西堀の人も、みんな大和田小学校。学校行くのも大変だったんです。

学校の帰りは道草を食って、畑や山の中で遊んだりして楽しかったね。学校行くときもぞろぞろ集まって、「ぐずぐずしていると置いていくぞー」なんてね。車が通らないから危なくないんですよ。

高橋　小学校三年生までは男女一緒のクラスだったけど、四年生からは別になったね。

弁当にはお米のご飯

尾崎　小学校一年生くらいまでは着物で

学校へ行ったけど、あとは洋服だった。でも、元旦にはセーラー服とかスカートとか、よそ行き用の新しいのを着せてもらえるのが楽しみだったね。お寺のお嬢さんや医者のお嬢さんは、ちゃんと着物を着て袴をはいていた。

高橋　元旦や天長節みたいな祭礼のときは、学校からミカンや乾パンや菓子パンが出てね。ミカン食べながら帰ってきたりしたよ。

尾崎　だけど、学校給食がないから、毎日、親は弁当作りが大変だった。なにしろ、米のご飯は別に炊くんだからね。

高橋　ふだんは麦飯なのよ。米のご飯は年寄りと弁当でしか食べられない。だからお弁当は楽しみだったね。

尾崎　農繁期なんかには「麦刈り休み」ってあって、学校が一週間くらい休みになってね、手伝いをするんだ。

高橋　今はコンバインで刈っちゃうけど、昔は手でこうやって鎌で刈ったんだよね。麦の中にはサツマイモとか植えてたね。

尾崎　自分のうちで食べる分だけだから、ひとつの畑にキュウリとかナスとか、いろいろね。

高橋　親は真っ暗になってから帰って来るから、子どもはご飯炊いたり、風呂わかしたり、そういう手伝いはしたね。

おやつなんかも、昔は「焼きびん」って言ったんだけど、今で言うお好み焼きみたいのがあってね。「くるまや」といって、麦や米を水車でついてくれるところに持っていって、粉にしてもらって作ってくれた。

尾崎　あとはサツマイモ、ジャガイモ。子どもがいっぱいいたから、「学校から帰ってきたら食べるんだよ」ってドウコの中に入れておいてくれるの。あと、箱に一銭入れておいてくれるので、紙芝居が水飴売りに来たときは買ったりしたね。せんべいや菓子なんてなかった。

志木駅まで原っぱだった

高橋　夜は真っ暗ですよ。街灯なんてとんでもない。東武東上線の志木駅が見えたんだから。全部原っぱで、よーく見えたの。

尾崎　電車の音がガタコンガタコン聞こえてきて、「一番の電車が通るよー」なんてよく言ったもんだ。

近場には店もなくて、今の志木街道のところに二軒あっただけだった。畑の真ん中にたばこやさんがあってね。今の「みわたばこや」さんだよ。それから、大和田の魚久さんがリヤカー引いて魚とか売りに来たり、志木の方から豆腐を売りに来たり。

高橋　立教学院ができたのが昭和三〇（一九五五）年くらいかな。

尾崎　前はね、遠くの人たちが畑を借りていたの。それが農地解放で、借りた人のものになって、それでその人たちが立教に売っちゃったんだよね。

その土地の半分くらいは、ブドウ園だったの。ブドウがなると、近所の人がみんなざるを持って買いに行ったんだよね。

高橋　立教学院ができて、ブドウ園は川越の方に越してったんだよね。

学徒動員で被服廠に

尾崎　小学校を出たら細田学園に行った。女学校は、このあたりでは細田しかなか

った。川越にはあったけどね。

高橋　その頃は高等技芸女学校って言ったね。

尾崎　この村でも行った人は二人しかいない。親が、「女の子でもこれからの時代は女学校出てなくちゃだめだよ」って、行かしてくれて。

女学校は二年間だけど、二年生のとき学徒動員で朝霞にある陸軍の被服廠（ひふくしょう）に丸一年くらい行かされてた。朝霞の駅からちょっと行ったところに、一里四方もある大きな工場があってね。兵隊さんの洋服からパンツから毛布、軍隊で使う物みんなその工場で作ってたの。

生地をこんなに厚く置いといて、機械で切っていくの。軍服のボタン付けなんて、一人で一日に五枚しか付けられない。太い糸と太い針でものすごく丁寧につけるんだからね。それでも検査してダメなら、こわしてまたやり直し。

ミシンもね、自動式のミシンが何十台もダーッてあって自動で動いてるの。だから危なくてね。手まで縫っちゃった人なんかもいる。一般工員に交じって働くんだけど、月給は一般工員が三五円なのに、学生だからって四〇円くれた。だから一般工員は怒ってね。「学生のくせに、何もできやしないのに、月給だけはいっぱいもらって」って。

お昼はお弁当が出るの。こんなでかい釜で蒸すんだよね。何千人って人が食べるんだから、大変なんだよ。お米の中に大豆が入っていた。「軍事工場はお昼が出るからいいよな」ってみんな言ってた。

高橋　私は学年が一級上だから、学徒動員は免れたの。高等小学校で二年間勉強したね。先生になる人は講習に行きなさいと言われて、夏休みは、自転車で浦和の師範学校に講習に通いました。私はならなかったけど、同級生で先生になった人は一人、二人かな。

尾崎　遊びに行くときはね、この辺の人はみんな池袋まで行った。池袋には映画館がいっぱいあったから、映画見に行ったり。あとは川越に遊びに行ったりね。

高橋　川越に映画館があったから、「愛染かつら」見に行ったりね。もんぺの上下でちょっとおしゃれして行ったね。戦争終わっても、しばらくはそういう格好だった。電車に乗ると、シラミがたかってきちゃったりして、嫌だったねえ。

兄たちの出征と空襲

高橋　出征で男の人がいなくて、どこのうちも困ってたよね。

尾崎　うちは五人兄弟で、みんな兵隊に出ちゃったでしょ。だから後に残っている人は大変だったのよ。うちの兄は新座で一人だけ近衛兵になって天皇陛下のお供だったからね。毎日牛乳一本くれたって言っていた。

高橋　私は女学校で、戦勝祈願で靖国神社まで歩いて行ったことがあるよ。夜出発して、朝着いて。それで祈願して電車で帰ってきたの。

尾崎　私は川越の喜多院だったけどね。

高橋　各家で防空壕を作ったね。防空壕に隠れたら、そこにちょうど爆弾が落ちて死んじゃった人もいたよ、気の毒にね。

今、立教が建ってるところに、時限爆弾が落とされたんです。ものすごい穴が

あきましたよ。跡が池になっちゃって。

尾崎　役所の人が、爆弾がいっぱい落ちているから外に出ないでくださいって回ってきたことがある。

　戦争が終わる年の三月十一日の大空襲では東京が焼け野原でしょう。こっちのほうにまで煙が来たんだよ。焼け出されてきた人が、このあたりにもうろうろしていてね、かわいそうだった。

高橋　ご飯だって、ジャガイモ入れたり、サツマイモや大根入れたり。供出が厳しくて供出米に取られちゃうから、うちで使う米っていうのは、たいしてないの。砂糖の配給は来ないし。だから戦争が終わるまで四年間、甘い物は食べられなかったよね。

　戦争が終わっても、食糧がすぐに出るわけじゃないでしょ。東京からサツマイモとか粉とか買いに来るの。着物持ってきて、これでくださいとか、気の毒だったね。

大変だった「嫁さんの仕事」

尾崎　農家やってると食べ物には困らない。どうにかこうにか生き延びてきたよ。でも、女の人は大変だったの。うちの中のことをやりながら、畑仕事もして。ここらへんの年寄りはみんなね、あんまり働かないんだよ。孫なんかと遊んで、うちの中のこと、やってくんないんだよね。嫁さんが忙しいの。食べることから何から。

高橋　畑にはだいたい夫婦で一緒に出て、それで一緒に帰ってくる。食事なんかは、うちにいる年寄りがしてくれた。

　それでも夜一二時だよね、寝るの。夜に洗濯をしたり、着るものなんかに継ぎを当てる「ぼろ継ぎ」をしたりしてると、夜中になっちゃうよね。朝も早いし。でも、若いから乗り切れたんだね。

尾崎　昔はいいもの着てないから、じきに破けたり穴が開いたりする。うちは母親が弱かったからね、ひいばあさんが私らなんかの面倒見たり、子どもの服を縫ったり、ぼろ継ぎなんかの縫い物していた。でも、私が高校に入った頃は二人お手伝いさんがいたのよ。その頃は「女中」って呼んでいた。一人は畑仕事、もう一人は家の中のことや、私の弁当作ってくれたりね。

高橋　お産のときは家族が産婆さんを迎えに行った。産婆さんは自転車で来たね。布団敷いた上に、ビニールみたいな、水を通さない油紙を敷いてくれたかな。

尾崎　私の親が私を産んだときは、隣のばあさんが来て産ませてくれたんだって言っていた。その頃は産婆さんなんてまだいなかったもの。みんなそうやって隣近所お互いに手伝った。お産は自然現象だからね。

観音様とお稲荷さん

尾崎　うちの前の神様は観音様で、女の神様だから、あっちからもこっちからも女の人のお参りがいっぱい来たの。寄付したのも女の人だから、女の名前が載ってるの。千羽鶴がいっぱいかかってた。

　藤宮さんの家のそばに観音様が倒れていたのを、私の親が、大工に頼んで祠（ほこら）を建てて入れてやった。二、三年前に誰かが火を付けて、燃やしちゃったから建て直したけど、昔はもっと立派な

うちだったの。

すぐそばだからね、今もお参りに行ったり、花あげたりしてる。

部落の神社はお稲荷さんだね。昔から初午の日には、のぼりを立てて部落の人が集まる。

高橋　稲荷神社には神主さんはいないんです。でも、初午の時だけ来て、お祓（はら）いをしてくれる。その後、皆さんで飲み会やるんです。

尾崎　そういう集まりには昔は男しか出なかったね。男の人が、サラリーマンになってからは、そうでもなくなったけど。

高橋　昔はお祭りのたびに、宿（やど）のうちに集まって、ごちそうを食べたりしたね。順番で宿になると、嫁さんは大変だった。今は外食できる店がいっぱいできたから、楽になりましたよね。

（聞き取り　平成二三年四月）

ＰＴＡは私の学校でした

関根　たづ子
昭和五（一九三〇）年生まれ
北野在住

子どもがプレハブの校舎に

生まれたのは岐阜県です。東京生まれの主人と昭和三一（一九五六）年に結婚して、新座に家を買ったのは三六年頃、ちょうどこちらが新興住宅地域になる頃でしたね。「北足立郡新座町野火止何丁目」なんていう長い住所でした。お友だちがお手紙くださるのに、「お宅すごく長いからとっても面倒だわ」って言われるような。

志木駅前なんて、ススキがいっぱい生えてましてね。南口はなかったので、電車を降りると反対側へ出て、踏切を渡ってうちへ帰っていました。

昭和三八年に上の娘が大和田小学校に入学しました。生徒数が急増した頃なので、校舎が足りなくて、教室は校庭に建てたプレハブ校舎だったんです。

それが暑くてね。授業参観に行ったら、子どもがみんなシュミーズで授業を受けているんです。その頃、脱脂粉乳が給食に出たでしょう。普通の校舎に入ってる子たちはあまり飲まなくて、すごく余っちゃう。だけどプレハブに入ってる一、二年生はのどが渇いているので、飛ぶような勢いでなくなるんです。

ＰＴＡはありましたが、今のＰＴＡとはずいぶん違っていましてね。お子さんがもう卒業していても、町会議員さんが会長ってこともありました。会長などの要職は選挙で決めるんじゃなくて、最初からそのつもりで入っている偉い男の人がなっていました。

運動会になると、大きな掲示板みたいなのに、ピラピラした貼り札がぶら下がっていましてね。誰さんが酒一升持ってきたとか、いくら寄付したとか。

運動会の後は、一升持ってくるような町の顔役の人たちと先生たちとで、必ず酒盛りがありました。一般の父兄はそのなかに入れない雰囲気で、運動会が地域

のお祭りみたいでしたね。

その頃のＰＴＡ活動は廃品回収が主でした。学校にテレビを置くためにやったような記憶があります。

ＰＴＡとの出会い

最初、私はＰＴＡってどういうものかわからなくて、子どもが一年生に入ったし、ちょっと勉強したいと、担任の先生に聞いたんです。「ＰＴＡって先生と父兄の会だっていうのはわかりますけれど、どういうことを勉強するんですか」って。すると本を一冊くださったんです。

それが物議を醸しましてね。ＰＴＡ会長から「そんなの、おめえ読んじゃダメだぞ」って言われて。「特定の」じゃないかと思われたんでしょう。思想的にかたよっている本だから読むな、ということなんです。

主人に言ったら、「じゃあ、その本を書いた人と反対の意見の人が書いた本を見つけてきて、読んだらどうだい？　そうすればバランスがとれてくるから」ってアドバイスされましてね。「ああなるほど」なんて思ったんですけども。とってもややこしい時代でした。

それから私はＰＴＡに興味が出てきちゃって。「ＰＴＡって知ってる？　勉強してみない？」というようなことを、知った人に言ったんです。一緒に勉強してみたいっていう人が五、六人いましてね。それで、お勉強を始めたんです。

ある先生から「幅広く勉強した方がいい」って言われて、県のＰＴＡや福祉関係の仕事をしていた偉い人に、「お話ししていただけますか」って聞いたら、「ああいいよ。どこへでも行ってあげるよ」って、来ていただいたこともあります。こういう勉強会が私のＰＴＡの始まりっていうのかしら。

勉強会と講演会

講演会は小学校をお借りすることが多かったですね。校長先生にお願いにいったら、「どこかから不協和音みたいのが出るかも知れないけど、子どもを中心としたお話で、悪いお話じゃないので、やってみたらどうですか」っておっしゃって。当時は千葉校長先生だったと思いますが、とても理解してくださいました。結構大勢の人が集まったんですよ。

小学校の先生も三、四人は出てきてくださいました。先生には、講演会への参加が難しい事情もおありになったらしいんですけど。

講師には、いろいろな先生をお呼びしましたね。手芸教室の先生とか、校外生活指導っていう、地域で子どもたちを指導するようなお話をしてくださる先生とか。わりとお勉強会は、盛んだったんです。ＰＴＡの会合もなかなか出席率がよくて、皆さん熱心でしたよ。親御さんたちにとっても、ＰＴＡや学校との関わり方の過渡期だったんでしょうね。

私はクラス役員になって、「地域の人たちも大事だけれど、やっぱりクラスの親たちが中心になったほうがいいんじゃないの？」なんて言ったりしたんです。「前もって会長とか役職につく人を決めちゃうんじゃなくて、選挙で決めたほうがいい」とか。知らないもんですから、勝手にいろんなことを言って。

親が入れない酒の席

運営委員会なんかで、何かに反対するでしょ。そうすると、やり玉にあがっちゃってね。「反対の方は手をあげてください」って言われて、反対するのはだいたい新しく入った人。何にも知らないから屈託なく「ハイ」って手をあげる。

そうすると、すぐ、「両手あげたでしょ！　あなた。両手両足あげたいくらいじゃないの？」っていじめられる。「そんなことしたら転んじゃいますよ」って言い返したんですけど、怖かったですよ。ここの土地に、もうずっと根を下ろしていらしたような、きっと地域ではお名前の知られた方なんじゃないのかしら。私は何にも知らなかったから、できたんでしょうね。

その頃は卒業式の後にもお酒の席があったんです。役員と先生とが一緒にお祝いの酒盛りをしてましたね。卒業する生徒の父兄でも入っているなら話は別ですけれど、入ってないんです。それなのに、ＰＴＡ会費から酒代が出ている。

私なんか、子どもが卒業するのに、役員やっていても、全然声もかからない。「おかしいんじゃないの」って言ったんです。「お酒で乾杯じゃなくて、お水で乾杯にしたらいい」と言ったら、すごい物議を醸して。

主人は「とにかく今まで何もない静かなところだったので、あんまりかき混ぜちゃいけない」と言いました。洗面器を例にとりましてね、水が入ってる中に手を入れてかき混ぜると、みんなこぼれちゃう。「あなたが知らないところへいってこんなことやると、水がなくなっちゃうから、こぼれない程度に…。とにかく、焦らないでやらなきゃだめだよ」って。

目指すは安全な通学路

後になって、大和田小学校から分かれて、東北小学校ができるんですが、大和田小学校にいた頃は、もう署名運動ばかりでしたね。

北野の自宅から大和田小学校に通うとなると、すごく遠いんですよ。子どもの足では何十分もかかるんです。雨の日なんて、皆がバスに乗るから乗りきれなくて、お母さんたちがエッコラ、エッコラお尻を押して詰め込んだりとか。

ランドセルで一人分とっちゃうから、ＰＴＡで「ラン廃運動」というのをやったんです。ランドセルは学校に置いてきましょう、ランドセルの分も子どもが乗れるようにって。

通学路も危険だったんです。大和田小学校の前の広い通り(旧川越街道)に歩道橋がないから、渡るのが大変なんです。

それに、道路の脇を野火止用水が流れていて、雨が降ってあふれると、道路か用水かわからなくなって、子どもが入っちゃうんですよ。そうすると、トレーニングパンツに着替えて授業を受けます。危ないから用水にふたをして暗渠にしてほしいという運動をしました。

他にも、通学路を拡張してほしいとか、舗装してほしい、ガードレールや信号機をつけてほしいという運動もしました。

下の娘が入学する頃には、プレハブのほうも満タンになっちゃったので、一時、野火止小学校に移動しましたが、ここへ

の通学路も広い県道（志木街道）を渡るので、そこに歩道橋をつくってもらう運動もしました。

陳情に駆けまわる日々

運動の最初は陳情です。陳情するには、趣意書を書いて一軒ずつ署名をもらいに回るんですが、署名をいただくのは大変でした。快く「ハイ」って判を押してくださる方ばかりじゃなくて、「ぜいたく言うんじゃないよ」なんて人もいますしね。

「川越街道は狭いので、傘をさすと自動車に接触して危険だから、野火止用水にふたをして歩道にしてほしい」と言ったら、「自分たちが学校に行ってた頃は、傘なんかささないで簑（みの）かぶって行ったもんだ」なんて言われたこともあります。

「東京人は、越してくるとすぐぜいたく言って、わがままなこと言う」って。でもまあ、そこをお願いして。署名や印鑑ひとつもらうのにも、一時間くらいいろいろ言われたり。大変苦労しながら集めましたね。

こういう運動をするのは東京から来た人がほとんどでした。どうしても比較するでしょ。「同じ税金払ってるのに、なんでこっちのほうばっかり、こんなに不自由なの」とか、そういう思いがありましたから。

それに、署名をとって歩くのは女性でした。今思うと、クラスの皆さん、何だかんだ言いながら、本当によくやってくださいました。通学路の安全には、みんな一生懸命でしたね。

ただ、当時は、すごく体質が古かったんでしょうね、協力してくださる先生は教員組合に入っている方が多かったんです。そうでない先生は、お願いに行くと「ちょっと校長の手前もあるから」とか言われたり。やっぱりそういうことに関わると、出世できないこともあったのかなと、まぁ外からの推測ですけど。

農家や県やバス会社にも

要望によって陳情先が違うんです。農道みたいなところを通学路にして通らせてもらっていて、それを少し広くしてもらいたいというお願いは、市ではなく地主の農家の方へ交渉に行く。会長と副会長、校外指導の役員に一緒に行ってもらって、「地域の子どもたちが通らせてもらうのでお願いします」って。

畑を削るのは大変なことなのに、なかにはすごくいい人もいて、畑の横のぐちゃぐちゃの道を直してくださったり。それでまたお礼に行ったりとかね。

私たちの気持ちの根っこにあったのは、子どもたちを安全に通学させたいっていう思い、それだけです。本当に正直にそのことを言うより仕方がないんです。だから、変な色気がなくて、古くからの地域の方々にも通じやすかったのだと思います。

それから、プールや体育館の建設。あの頃は本当に何もなくて、プールは借りていて、泳ぎに遠くまで行っていたんです。だから、「プールをつくる土地を市に売ってほしい」って、農家の方にお願いに行ったりしました。

野火止小学校に移ると、ここでも県道沿いに野火止用水が流れていて、塞いで

はあったんですが、水が集まるところは開いていたんです。その横にバスの停留所があって危ないので、西武バスだったか、池袋の本社に行って、停留所のポールを移動してもらうようお願いしました。

大和田小学校で、川越街道の横の用水を暗渠にしてもらうときは県まで陳情に行きました。県へは他にも信号機を設置してほしいとか、何回も行きました。陳情は、出した後も「あれどうなったんでしょう」とか、「いつ頃になるでしょうか」とか結果を聞きに行かないといけない。出しっぱなしにしていると、いつまでも出しっぱなしになっちゃう。

県へは、私たちだけで行くのと、市役所の人が一緒に行ってくださるのとでは、ちょっと違いましたね。自分たちだけでは、何回も何回も行かなきゃならないけど、市の人が一緒に行ってくださると話が通りやすかったです。

東北小学校の建設運動

野火止小学校は木造の平屋建てみたいな古い校舎だったんです。トイレにどこからでも入れるので、犬がトイレに落ちちゃったことがありました。四〇代になる娘がいまだに言うんですよ。「犬が落ちてからしばらくは、怖くてトイレに入れなかった」って。

下駄箱も、雨が降ると、もろに濡れちゃうんです。上履きの中にカマキリが卵を生んでたり。いろんな事件があって、今思うとおかしかったですね。

やっぱり近いところに学校が欲しいと、小学校の建設運動を始めて、また署名運動に駆けずり回りました。そしてやっとできたんですよ、東北小学校はね。

もう、すごく身近、自分たちでつくったみたいなのね。「ああ東北、われらの小学校」なんて校歌がぴったりでした。

「あそこに小学校が欲しいんですけど」ってお願いして、どれだけ歩いたかわからない、夜遅くまでね。開校が決まった時なんて、もう小躍りして喜びましたよ。

初めての女性ＰＴＡ会長に

東北小でＰＴＡ会長になったのは、本当に偶然が重なったんです。

五〇年も前の話なので、時効だと思うんですけど、会長が選挙違反の疑いをかけられて、しばらく不在になってしまったんです。

その時、役員会が紛糾しましてね。朝の九時半頃から始まって、かんかんがくがくで午前中いっぱいもめちゃって。「政治をＰＴＡに持ち込んだってことが第一よろしくない」ってことで、「会長は即やめてもらいたい」っていう意見とか、「揃いのＴシャツを着て応援した役員の人たちも慎んでもらわなきゃ困る」、「役員みんなクビ」とか、もうすごかったですよ。

それで、副会長だった私がやむなく代行みたいな形で会長になったんです。それまでは会長は絶対に男の人でしたね。新座のＰＴＡで女性の会長は私が初めてでした。

体質が古い頃でしたから、選挙違反みたい話はどこにでもあったんじゃないですか。その頃、うちは町内会の役員をやっていたんです。選挙になると区長さんが来て、「今度、選挙があるでな、冷たい

水持ってきたから飲んでくれや」とか言って、一升瓶をポンと置いていく。「冷たい水って何なのよ」って見たら、お酒だったりしてね。でも、そういうのをいただくと、何かにひっかかるといけないからと、返しに行ったり。

ちょうど時代の変わる時っていうんですか、ＰＴＡも変わる時でね。いろいろと目まぐるしくて大変でしたよね。

ＰＴＡの規約づくり

こんなことがあったので、これからは役員を選挙で決めようということになって、ＰＴＡの規約を改定することになりました。その時は本格的な規約をつくりたいと、私もその気になっちゃって、だいぶん力が入ってたの。規約を変える活動の中心になって、勉強させてもらいました。規約がいいらしいと聞いたら、志木や清瀬の小学校にも規約を見せてもらいに行きました。

東京のお友だちから、水江八千代先生という、ＰＴＡについてとっても詳しい方がいると聞いて、先生のところへ定期的に通ってお勉強させてもらいました。

水江先生をお呼びして講演会を開いたら、満席になって立ち見の方も出たんです。そのなかに赤ちゃんおんぶした方がいらしてね。そうしたら先生が喜んで、「こういう方が集まってくれるのが本当のＰＴＡです」っておっしゃいました。

先生のお話は、「ＰＴＡとは、子どもを中心にして、お母さんと先生とが、子どもの幸せのために勉強するところなんですよ」という内容でした。「子どもを良くしていくにはまず環境。お母さんたちはいい環境をつくってあげてください。自分の子どもばっかり優秀に育てても、環境が悪かったら何もなりません」とかね。すごい刺激でした。

収穫が多かったＰＴＡ活動

ＰＴＡって、お月謝がいらないのに、すごいお勉強になるところだったんですよ。もうびっくりするくらい。私なんか、結婚してずっとうちにいて子育てしていて。子どもが学校に入って、初めて外の世界に触れたし、ＰＴＡという組織に入ったでしょ。だから、今まで聞いたことがないような知識が入ってきて、「わぁすごいとこだな」って思いました。

お友達も増えて。ＰＴＡのお友達って、いまだに続いてるの。お勉強させていただいたうえにお友達ができて、楽しかったし、知らないこと、いっぱい教えてもらったしね。ＰＴＡ、本当にいいところだったと思います。

この頃は新座も本当によくなってビックリです。こんなふうにきれいな街になるとは、その当時は想像もつかなかったですね。学校もいくつもできたし。今から思うと、そういう歴史みたいのが懐かしいですね。

子どもが学校への行き帰り、よく畑と農道の間の有刺鉄線に洋服をひっかけて、どれだけカギ裂きを補修したことか。

「それも懐かしいわね」なんて、もうお母さんになっちゃった娘と時々話をするんですけどね。思い出ですね。

（聞き取り　平成二三年四月）

生きがいは婦人会と民踊

吉田　けい
昭和五（一九三〇）年生まれ
野火止在住

生い立ち～新座に来るまで

ちょうど八〇歳でございます。弱冠まだ八〇。生まれたのは江南町、現在の熊谷市です。兄弟は六人。兄が一人いまして女性では一番上。

実家は農家でした。小学校の頃はね、引っ込み思案。もう、どこにいるんだかわかんない。それが何で活発になったのかわからない。妹たちはね、みんないい子でした。私だけがはみ出しでした。

熊谷では、編み物や手芸全般の教室の講師をしていました。その頃は独身で過ごそうと思ったのね。編み物教室が盛んだったでしょう。だから、これで身を立てようと。講師じゃなくて、自分で学校作っちゃおうと思ってたんです。

それで、その仕事をしていた先生に相談したんです。「結婚しないで、これで身を立てて行こうと思う」って。その方は独身でね、四〇歳過ぎていたかな。「だめだよあんた。女は結婚しなくちゃダメ。結婚しなさい」って言うの。「私は結婚しないでこうやってるけど、ひとつも幸せじゃない」って。それで学校作るのは断念したわけ。

熊谷の編み物学校に飽き足らなくなって、浦和にある服飾学院に通おうと思ったら、父親に反対されたんです。その頃の女の人は、みんな家にいました。外へ出て行った人はいなかったわね。家を出るんだったら縁を切ると言われて、「ハイ結構です、切ってください」と言っちゃった。

それで勘当。だから学費は一切出してもらっていません。大宮に下宿して編み物学校に通いながら、頼まれて編むアルバイトをやっていました。雑誌の『ヴォーグ』に私の作ったセーターを、俳優の船越英二さんがモデルで着ていました。当時は、機械編みが始まった頃でした。

結婚は昭和三一（一九五六）年で、二

六歳のとき。当時としては遅いですよね。父親の勧めなんです。考えてみたら、父親が言うことにウンって言ったことなかった。だから一回くらいは父親に親孝行しようと思って。親孝行で結婚したんです。

主人も、私のようなじゃじゃ馬をならしたんだから、すごいよね。何を言っても言うことを聞かないと思ったから、言わなかったんじゃないかな。

新婚の頃は熊谷市。熊谷駅のすぐ近くに住んでいました。昭和三三年に娘が生まれて、主人が都内に勤めていることもあって、その年に志木市へ来たんです。遠い親戚が志木におり、誘われました。

でも、熊谷にいる頃は、志木なんて聞いたことがなかった。浦和まではよく知ってたんですけど、東上線なんて全然知らなかったですから。志木では小学校や中学校のＰＴＡで役員をやったりしていました。家は借家でした。

高台の新興住宅地に

新座市に越して来たのは昭和四二（一九六七）年。四〇年代は、ちょうど新興住宅がワァーとできてきた頃で、私もその一人なんです。当時、志木駅の南口、新座側は、それこそ長靴を履かないと歩けない。それで靴を持って家を出て、電車に乗るとき履き替えるような状態でした。駅の北口、志木側には家がありましたけど、こっちはまだなかったですよ。

子どもは二人とも学校は志木で、越境ですから、新座に友だちいないんですよ。だから、成人式やなんかもつまらなかったみたいね。

住所は野火止五丁目なんですが、当時は、「埼玉県北足立郡新座町大字野火止字上北側」っていいました。その頃に野火止五丁目から六丁目にできた新興住宅地を、一括して「上北側」といったんです。立教のあたりから川越街道くらいまで。野火止用水の右と左ですけど、その向こうの通りからは大和田ですね。あそこのへりです。

たまたま新座で住宅地の売り出しがあったんで、見に来たんです。そこは野火止台地の一番高いところでした。私、高台が理想だったので、即、決めちゃったんです。私が見に来て、私が決めちゃったの。「もう、あそこ決めてきたよ」。主人も「あっそう、ふーん」ってな感じ。それで新座に来たわけ。

婦人会との関わり

私が婦人会に関わり始めたのが、昭和四五年。知りたがり屋で、いろいろと新座のことを知りたくて。婦人が活躍できる場はないかなと思っていたとき、紹介されたのが並木清子さん。昭和三九年から婦人会の会長をされていた方です。そこで婦人会があると知ったんです。当時、私、若かったけど婦人会にあこがれてたのよ。やりたいなと思ってたの。

並木さんは長く会長をされていて、その後、岡野さん、塩野さんが二年くらい。その後、塩野さんがちょっと体調を崩して、できなくなったので、私になったんです。会長・副会長を合わせると三五年間続けましたね。

そもそも婦人会は、物資が少なくて、おしゃれしたくてもできない時代に、い

ろいろな物を共同購入しようというのが始まりだったんじゃないでしょうか。私が関わる前ですからわかりかねますが、私の頃にも共同購入の名残がありました。北海道から日高昆布を取り寄せていましたね。県の婦人会からの要請で、ちふれ化粧品も購入しました。当時は百円化粧品って言いましたけど、今は百円じゃ買えませんよね。

その頃、婦人会では会服といってお揃いのグリーンの上着を着ていました。着物式の打ち合わせで、なぎなた袖（袖下がなぎなたの刃の形のような丸みをもった袖）、丈は膝くらいでした。既製品で、買わされました。当時は皆おしゃれしたくてもできない。けれど、会服を着ていると、どこへでも行けるっていうのがあったらしいです。

私も入ったからにはと思って作ったんです。作ったけれど、着ませんでした。私たちの年代は着ませんでしたが、先輩は皆、着てましたね。その頃はまだ、洋服より着物を着る人のほうが多かったですよ。

婦人会の支部を立ち上げる

上北側で、会長の並木さんから許可をもらって、婦人会を結成しましょうって回覧を回したんです。それで全世帯に入ってもらいました。一九七〇）年の一〇月です。昭和四五（一九七〇）年の一〇月です。並木さんからは、それだけの人数があるんだから「上北側婦人会」として別に作りなさいと言われたんですが、「地元の方と一緒に行動したいので、大和田婦人会に支部として入れてください」と頼んだんです。それで、大和田婦人会の会員数がドカーンと増えました。

よそ者だからいじめられる、仲間はずれにされるというのは、話だけは聞きました。私が婦人会を作りましょうって言った時に、最初に声をかけた方から、「吉田さん、婦人会なんて作ったってね、いじめられるよ。よそ者だって。だから、やめたほうがいい」って言われた。

でも、よそ者だって、別にねぇ。私はお陰様で、ひとつもいじめにあっていません！　野火止台地に家がパラパラしかなかった頃からの先祖がいるっていう人は、少ないですよね。今はよそ者のほうが多いんですよ。もう、よそ者って言ってられないじゃない。

私は越してきてすぐ、野火止五丁目の町内会の役員やったんです。町内会長が吉田富吉さんで、私は会計だったの。それに、婦人会の会長と支部長さんから、すごくいろいろな人に紹介してもらえたの。そういうのがあって、あんまり言われなかったんじゃないでしょうかねぇ。それとも地元の人だと思われたんですかね。

でもね、新座って私は好きなんですよ。私の肌に合ってるんじゃないかな。新座が好きだなぁって思いが、周りの人にも伝わっていたのかもしれない。平林寺なんて紅葉ですばらしい。平林寺は熊谷にいた頃から知ってたんですよ。志木にいた頃には、子どもを連れて歩いて行きました。

やっぱり、何でもそうですけど、好きになることですよね、それが一番。旦那さんでもそうよ。自分から好きにならな

きゃ相手が好きになってくれないでしょ。友だちだってそう。だから私、世の中何でも好きになる。生かされているのも感謝。もう本当に感謝は忘れない。マイナス思考はなし！　みんなプラス思考にもっていきます。ねぇ、一生そのほうが得でしょ。

婦人会の多様な活動

朝霞保健所から栄養士さんに来てもらって、当時の大和田公民館で料理教室をやりました。片山婦人会のほうは片山公民館でしたね。その他にも、教室はいろいろやってましたね。

生け花は龍生派っていう流派から、並木秀月先生に来てもらっていました。私は最初の頃から民踊部に入っていました。どの教室もだいたい月二回くらいです。以前、跡見学園の伊藤嘉夫先生にも来ていただいて、短歌もやってましたね。

茶道は、並木さんが会長の頃からでしょうか。参加者は民踊が一番多かったです。何年かたってから、詩吟が始まりましたかね。

婦人会で旅行にも行っていました。日帰りと泊まりで年二回。また、大和田婦人会では「むつみの友」という冊子を発行していました。内容は、その年にあった報告と、旅行の思い出、各教室の収支決算や会費、会員名簿とかですね。以前は支部長がいろいろ書いていましたが、最近は会長さんが一人で、一生懸命手書きして、発行しています。

婦人会は、市民まつりとか体育祭とか、違う団体の方と一緒に行動をする時は、ほとんどお茶当番の手伝いをします。

オリンピックの時には、先輩が自衛隊の射撃場でお茶当番をされたということです。民踊部もオリンピックのマークの浴衣を作って、踊ったらしいですよ。何音頭だったんでしょうか。以前は皆お揃いで浴衣着て踊ったんですよね。新座という字の入った浴衣で、黄色とか銀色の帯をしましたね。

交通安全では、街頭啓発で割烹着を着て、車の運転席にティッシュを配って歩きます。

青少年市民会議は、学校の正門で、市長さんを先頭に「青少年市民会議」のたすきをかけて、「おはようございます」って声をかけるの。青少年市民会議には婦人会のほかに町内会連合会、保護司会、校長会、市長さんなども入っています。

毎年一回、日赤の献血車両を呼んで、献血もやっていますね。

罪を犯した少年少女たちのバックアップをする「更生保護婦人会」では、川越刑務所や千葉県にある婦人保護施設「かにた婦人の村」の運動会に参加します。

浦和にある保護観察所には、年に一回くらい、刑を終えて社会に復帰する方が就職の面接に行くための衣料を持って行きましたね。ブレザーやワイシャツ、ネクタイとかを何人か分、サイズもいろいろ集めて持って行き、好きな物を選んでもらうんです。

他に婦人会の活動としては、社会福祉協議会の赤い羽根共同募金、あと人権教育推進協議会やコミュニティ協議会にも参加しています。それでまた、どれも一生懸命なんです。ボランティア精神旺盛ですからね。婦人会はいつでも何をする

にも、無報酬が基本ですから。何をやっても一切、報酬みたいなものはないですよ。

新座市がくらしの会や生活改善クラブ、食生活改善協議会などを発足させる時も、最初は婦人会に呼びかけたんです。今は婦人会の人だけじゃなく、いろいろな方が個人でも入ってますね。

今は、婦人会に入らなくたって、コミュニケーションの場がいくらでもあるの。お茶にしても、お花にしても、いろいろな会がありますもんね。ただ、それは、一つのことを専門的にやる会ですよね。

婦人会は、学校でいうなら総合大学っていうのかしら。会員は、普段はそれぞれがいろいろな団体で活動していますが、市などから要請があれば、婦人会として協力するんです。でも、婦人会として、自分たちから「これをやろう」ということは、あんまりないですね。

民踊の指導三八年

民踊部で私が踊りを教えることになったのは、県から来ていただいていた大室先生が辞められた後を引き継いでからです。三八年やりました。

民踊部が踊るのは、創作民踊とか新民踊ではありません。教育委員会の全国連合会が推薦している曲です。うたげの時などに、なんとなく身体を動かして踊るのが民踊の始まりですからね。本当に土地、土地で違うわけですよ。それを都道府県の教育委員会が推薦して、連合会が全国に広めているんです。

関東にはあまりありません。農家が冬でも仕事ができるからです。民踊というのは、冬に仕事のできない地域で、人々が集まって楽しく歌ったり踊ったりしたのが始まりですよね。民踊部はそういう民踊を教えているんです。

民踊を教えるのはお師匠さんじゃなくて、指導員なんです。ですから、ボランティアです。新舞踊を教えるのは日本舞踊のお師匠さんですけど、免許状もらうのにお金がかかるの。お金持ちじゃないから、私はやらなかった。

新座に来てからすぐ、都内の専門の学校へ行って勉強して、日本民踊指導者の資格を取りました。やっぱり好きなんでしょうねぇ。何でもそうですけど、のめり込んだら、最後まで。だから、何事ものめり込んで、途中で終わったことがないんですよ。

今も、第二老人福祉センターや福祉の里で民踊の指導をしています。やっぱり好きなんでしょうね。

（聞き取り　平成二二年一二月）

母親たちの運動——子育てと教育

藤巻　トキヱ　昭和七（一九三二）年生まれ　東在住
竹森　絹子　昭和一二（一九三七）年生まれ　新堀在住

人口急増期の新座の学校

藤巻　昭和三八（一九六三）年に杉並から来ました。当時の志木駅付近は砂利道で、自転車はハンドルをとられてしまうので怖くて乗れないし、駅前ロータリーも雨が降ると水がたまり、タクシーを待っていると水をひっかけられる、という状況でした。当時、新座には幼稚園が一つしかなく、五歳の子どもを入れるのに並んで申し込みました。

竹森　私は板橋に住んでいましたが、昭和四二（一九六七）年に新堀に引っ越してきました。ちょうど東久留米と新座の境だったので、学校は東京になるのかしら、などといいかげんなことを考えていました。

藤巻　子どもが大和田小学校に入りましたが、通学路は、北野の立教グランドの通りから有刺鉄線が張られた農道を通り、旧川越街道（県道和光新座線）へ出るという道でした。非常に交通量が多く、道が狭いので、雨の日に子どもの傘が車にぶつかるんです。学級会で話が出て、危険なので側溝（野火止用水）にフタをしてもらおう、とＰＴＡに持ち込んだのですが、一年たっても何も変わりませんでした。

このことが、私が母親運動にかかわるようになった原点ですね。ＰＴＡというのはいったい何なのか、有志が何人か集まって、先生二人と一緒に勉強しようということになりました。

毎月テーマを決めて勉強会をして、ガリ版刷りの「のぞみ」という会報を出しました。昭和四八（一九七三）年四月の六六号まで作りました。テーマはＰＴＡのことから野火止用水のこと、教育基本法、日米安保条約、老後問題、消費者問

題、と多岐にわたっていました。

やがて、大和田小学校が満杯で二つに分かれることになり、うちの子どもは新設の東北小学校に行くことになりました。大和田小のＰＴＡがとても古い体質だったので、東北小はなんとか民主的なＰＴＡにしたいと、設立準備委員会をつくって、会則など時間をかけて話し合いました。

ＰＴＡの問題は新座に限った問題ではないとわかり、全国ＰＴＡ問題研究会というのが東京にあることを知り、そこに入って勉強しました。そして、自分のところのＰＴＡだけではなく、市内や近隣の小学校のＰＴＡにも関心が向くようになりました。

そんななか、子育ての勉強会などで大矢恒子さんに出会い、新座で母親大会を開きたいという趣旨に賛同して、私も初回から参加することになりました。

竹森　私も専業主婦で子育てをしていましたが、子どもが通っていた西堀小学校がマンモス化して、新堀小学校ができることになったんです。

ちょうどＰＴＡの広報委員をしていて、別の委員の人と二人で、周辺の住民に対する学校建設説明会に行きました。設計図を何気なく見たら、校舎が敷地の南側に建ち、校庭が北側になっているんです。おかしいと思い、勇気を出して質問したところ、すごくあわてて説明になっていませんでした。

後でわかったのは、新堀小の敷地の一部が清瀬の土地で、民家が隣接しており、その民家の日照権を守るため、ということでした。でも、このままでは子どもたちがずっと陽の当たらない校庭で遊んだり運動したりすることになる、それでは困るとＰＴＡに訴えたんですが、「決まったことだから」と取り上げてくれませんでした。

その後も市の人を学校に呼んで説明会を開かせたりしたんですが、らちが明かず、やむなく新堀地域の父母に呼びかけて「新堀小をよくする会」というのを立ち上げました。昭和四八（一九七三）年のことです。

議会に請願したり、臨時議会が開かれて傍聴に行ったり、その当時としてはすごく大きな運動になり、最終的には隣接の土地を買うことで片がつきました。そういう運動をするなかで、大矢さんや藤巻さんと出会いました。

盛大だった新座の母親大会

竹森　母親大会の始まりは、昭和二九（一九五四）年三月の、ビキニ環礁におけるアメリカの水爆実験に抗議する「核戦争から子どもの命を守ろう」という呼びかけで、翌三〇年六月に「日本母親大会」、同七月に「世界母親大会」が開かれたことです。

新座ではこれよりずっと遅れて、昭和五〇（一九七五）年に第一回新座母親大会が開かれました。その四年くらい前から四市（朝霞・志木・和光・新座）合同の母親大会が開かれていました。

第一回から一二年間、大矢恒子さんが実行委員長をやってくださって、当時は新座で女性の集まりがなかったということもあり、一〇年間くらいは毎回五〇〇から六〇〇人が集まりました。

会場は毎回、市内の小学校を借りました。午前中は全体会で、各界で活躍されている著名な方の講演をお聞きし、午後は七つか八つに分けた分科会で話し合いをしました。

講演会の講師は、大矢恒子さんが「子どもを守る会」で活躍されていたので、有名な方にもずいぶん来ていただきました。分科会は子育てや高齢者問題など幅広く、本当に「ゆりかごから墓場まで」みたいなテーマ設定でした。一番人気があったのが学校問題、「子育てと教育」でしてね。

各分科会で出てきた要望は市長あての要望書というかたちでまとめて、市に持っていきました。初めの頃は市長交渉を行って、要望事項について、担当の部課長も同席してやりとりしたこともありました。即実行にはならないまでも、改善の方向にはなったかと思っています。

新座母親大会が大事にしたのは、「普通のお母さん」プラス「民主的な活動をしていらっしゃる団体の人たち」が一緒になって活動し、特定の政党・政派に固まらない、ということです。大会を開くときには、保育所や学童保育をつくる運動、消費者運動、環境問題や平和問題に取り組む運動など、一四、五くらいの団体の女の人に声をかけ、準備会をつくって進めました。

そういういろいろな市民運動、住民運動があった背景には、当時の新座の状況があります。人口がドッと増え、昭和四五（一九七〇）年に市制が敷かれたにもかかわらず、道路は未舗装、学校はない、図書館はない、ないないづくしのなかで生活要求がワアッと出てくる。行政はそれまでの古い体質のままで、どうしていいかわからず右往左往。さらに、全国的には革新都政・革新県政の誕生、といった状況でしたから。

その後、時代が移っていくなかで、母親たちの考えや要求は変わり、新しい運動も起こってきています。母親大会の参加者はだんだん減ってきて、今は午前の分科会、午後の全体会合わせて二五〇人程度でしょうか。母親大会に限らず、真面目な集会には集まりにくい状況がありますから。

学校給食のセンター化に反対

竹森　文部省が学校給食の「センター化」を進めるなかで、新座市の給食は、それぞれの学校で調理する「自校方式」を継続しており、評価もされてきました。ところが、昭和五五年、いくつかの給食調理場が老朽化したので修理する、という状況になったときに、市は給食センターを建てて、学校給食を一括してそこで作るという方針を打ち出してきました。

それを知った各学校の父母たちはものすごく心配しました。給食センターのいろんな状況を見聞きしていましたので、自校方式にはかなわないはず、ということです。「センター化反対」の声があちこちからあがり、ほんとに燎原（りょうげん）の火のごとくバアーッと広がりましたね。

人口が一〇万のときに、署名が全部で六万。最初はいろんな団体や地域、ＰＴＡとかでバラバラに運動していたんですけど、それではうまくいかないだろうと

いうことで「新座の学校給食を守る連絡会」をつくりました。

センター化反対、それだけなのに、やっぱりそれぞれの立場もあるし、主義主張もある。でも、運動というのはひとつにまとまっていかないと力にならないね、ということで、すごい議論をしてつくっていった運動です。

その後、新座でもいろんな運動がありましたが、さまざまな考えの人たちが、これほど目的をひとつにして一緒にした運動っていうのは、なかったでしょうね。特筆すべき運動だったのではないかと思います。中心になったのが、団体や政党ではなくお母さんたちということで、それが可能になったと思います。議会にもみんなで傍聴にかけつけました。

市と教育委員会はセンター化の方針を撤回。市民の運動が実ったのです。この経過をまとめた記録がありますので、ぜひ読んでいただきたいですね。

PTAは変わったのか

藤巻　最近、PTAの会長に「学級PTAは開いていますか」と聞きましたら、「学校の先生が忙しくて開けない」と言われました。「どうしてかしら」と先生に聞くと、「ともかく忙しくて、親と話し合いたいけど時間がない」と言われるんです。いったいどうして、子どもに密接につながっている親と教師が話し合わないのかしらと、もどかしい思いでいます。

町内会の回覧で「学校だより」を読みましたら、授業参観のときに、親の廊下での携帯電話や私語がうるさくて授業を妨害される、と書いてあり、びっくりしました。校長先生にお聞きしたら「父母に注意できない先生もいるんですよ」って。なんということかしらと思いましたね。

竹森　残念ながら、今のPTAはほんとに形骸化しちゃって、もう学校に協力するだけの、戦前、戦中の学校保護者会になってしまっているんじゃないかと思っています。

でも、いつも「PTAの規約をみてください」って言っているんです。「規約は変わっていないよ、みんながそのとおりに動いていないのかもしれない」と。

運動の原点、パワーの源

藤巻　私たちは戦中、戦後を生きてきて、やっぱり戦前のような時代に戻したくないな、という思いが一番強いですね。でも、文部省の動きを見ていると、ひところ「逆コース」と呼ばれたように、教育はあの時代に逆戻りしかねないな、と心配でした。

新しい憲法のもとでの民主主義教育に一所懸命取り組んでいる先生たちに共感して、親の立場からPTA問題に取り組み、そこでいろんなことが見えてきたんですね。

竹森　私もそうですね。あの戦争を体験して、その後、戦後の民主主義教育を受けたということです。

戦前はすべてにおいて天皇が頂点で、教育も「教育勅語」が絶対、少しの疑問をもつことも許されなかったわけです。

新憲法のもとで、主権は国民にある、一人一人私たちは基本的人権をもっているという自覚、それから、私たちが私た

ちの町を治めていくという住民自治、それが民主主義だという意識があるんです。戦前戦中に戻したくない、という思いが強かったんじゃないですかね、私たちの年齢層までは。

その後の方たちの意識ですか、時代感覚、問題意識、そのへんがどういうふうに変わっているのかなと、とても気になるところです。

（聞き取り　平成二二年一一月）